

解題

- 1 はじめに——尾崎資料再発見の経緯
- 2 尾崎三雄の経歴
- 3 尾崎の戦前公刊著作
 - (1) 1939年までの著作
 - (2) 1940年以降の著作
- 4 尾崎の戦前未公刊資料
 - (1) 「フィールドノート」の特色
 - (2) 新発見の「日記」の内容
- 5 尾崎のアフガニスタン研究の特色

1 はじめに——尾崎資料再発見の経緯

故尾崎三雄氏（以下本稿では尾崎と呼ぶ）は1902年11月6日に山口市黒川に生まれ、東京帝国大学農学部農学実科（現在の東京農工大学）を卒業して農商務省に入省した。1935年から3年間アフガニスタン政府の招聘で同国に派遣されて専門の害虫駆除を中心に農業指導を行ない、傍ら同国の一般事情に関する情報収集を行なった。いわば日本の実務畑におけるアフガニスタン地域研究のパイオニアである。その後尾崎は1941年7月には海軍省嘱託となり、日本が太平洋戦争に突入するなか1943年からは陸軍技師として食糧自給対策及指導に関わるなど、日本の軍事作戦に関係した。戦後は山口に帰郷して1959年まで農業試験場長として勤め、アフガニスタンに関しては全く口を閉ざしたまま1985年に亡くなった。

ところが2001年の9.11同時多発テロ以後の国際社会のアフガニスタンに対する関心の高まりのなかで、尾崎の残された資料にも俄かに再び脚光が当たることになる。そのきっかけは同年11月に山口市の公民館で開かれたアフガニスタン写真展であった。

編者は2003年の4月29日に一橋大学の加藤博教授、国立民族学博物館の臼杵陽研究員（当時）、一橋大学学生河村俊江さん、徳山高校の藤村泰夫先生らと山口県周防の尾崎幸宣氏宅を訪問し、故尾崎三雄氏のアフガニスタン関係資料を見せて頂き、そのときにテーマ別のフィールドノート類20冊ほどを拝見した。

このフィールドノートのなかから公開するに値すると思われる10冊ほどを選んでその内容を入力したものが本報告書の中心をなしている。さらに本報告書ではそれへの導入として、尾崎がアフガニスタンからの帰国直後の1939年5月5日に行なったラジオ放送の原稿

を収録し、また本解題の末尾に尾崎の戦前の公刊著作リストおよび尾崎のことを報じた新聞記事のリストを付した。

本解題ではその多くの部分が初公開となる本報告書所収の尾崎のアフガニスタン関係資料の歴史的な意義をより明確に理解するために、まず尾崎の経歴をアフガニスタン招聘前後を中心に跡付け、これまであまり振り返られることのなかった尾崎の戦前の公刊著作を逐一紹介する。次に本報告書に収録したフィールドノートに簡単に触れ、さらに今回は収録することを得なかった尾崎の「日記」¹の内容の概略を紹介し、最後に結びとして尾崎のアフガニスタン研究の特色について論じることにする。

2 尾崎三雄の経歴

冒頭でも触れたように、尾崎三雄は1902年11月6日、山口市黒川の徳光家に生まれている。1920年山口県立農業学校を卒業し、1923年に東京帝国大学農学部農学実科（現在の東京農工大学）を卒業して農商務省に入省した。その後1927年には徳光家から防府市真尾の尾崎家に養子となって鈴子と結婚、1935年農林技師となり同年から1938年までアフガニスタン国に農林省技師として招聘されたのである。

この前後に日本からアフガニスタンに派遣された技師としては他に池本泰兒（内務省技師）、近藤正造（民間建築技師）、相澤洲二（農林省技師）、上ノ土實（内務省技師）、藤芳義男（内務省技師）、池本喜三夫（東京農業大学教授）らがあり、尾崎を含めて7名であるが²、尾崎自身はある場所で招聘技師8名とも発言している。尾崎は帰国後の講演会で「日本人として始めてアフガニスタン国政府の招聘に應じて、其の政府の中に入った人は柔道の高垣信造氏であって、日本公使館の開設以前である」³と述べているから、或いはこれを含めているのかも知れない。

第二次大戦前夜の当時、ナチスドイツの台頭とともに国際関係が次第に緊張を増していくなかで日本はアジアのなかで英露の確執に翻弄される数少ない独立王国であるアフガニスタンに戦略的な関心を向けていた。こうした気運を背景に当時日本では「アフガニスタン・ブーム」のようなものが起きていたと言われる⁴。またアフガニスタンの側でも日露戦争における日本の「勝利」をきっかけに日本への関心が高まっていた⁵。

尾崎の「日記 a」の冒頭に見える1935年7月23日の「課長ヨリ『アフガニスタン』行ノ話アリ」という記述から、尾崎のアフガニスタン招聘はすべてが始まっている。以下主に日記の記述によって見ていくと、赴任前の細々した準備についての記載があり、10月2日真尾を出発、翌3日下関港から6,893トンの丹後丸でボンベイ（孟買）に向った。10月30日ボンベイに到着、11月2日発の汽車で4日の夜にペシャーワル着、そこから陸路で6日にアフガニスタン入国、午後6時にニムラ Nimla に到着している。

これ以降はアフガニスタン国農商務省技師として鈴子夫人とともに同国内で3年間を過ごした。この期間の詳細については本報告書所収のフィールドノートに詳しい。尾崎夫妻がカーブルを離れたのは1938年9月19日であり、翌20日にペシャーワルに到着してい

る。その後尾崎夫妻はインド国内を旅行⁶、10月13日にボンベイで鈴子夫人と別れて単身イラン、イラク、シリア、トルコ、ブルガリア、ユーゴスラビア、イタリア、ドイツ、オランダ、ベルギー、フランス、イギリス、合衆国の視察旅行を行ない、1939年2月7日に横浜港に到着した。

その後尾崎は1939年7月に海軍省の囑託となり、海南島に出張して農業調査などを行なった。1943年末から1945年までは陸軍技師として直接戦争に参画し、主に南方戦地における食糧自給対策およびその指導に従事して敗戦を迎えた。

また帰国後尾崎はアフガニスタンの在京公使館や同国からの留学生との交流を継続しており、一方「日記b」によると1939年5月に池本（泰兒？）とともに鉄道省の湯本昇監察官を訪ね、アフガニスタンの地理情報を提供するなどしている。1939年6月29日には藝術映画社の回教圏映画作成の座談会にも出席、他にもアフガニスタンに関する複数の講演会や座談会に出席した。また1939年11月からは大日本回教協會のアラビア語講習会にも参加するなど、尾崎にとってアフガニスタンおよび回教圏へのさらなる関わりを模索する時期でもあった。

しかし「日記b」の記述によれば1940年の春以降は明らかに農林省関係の仕事が増えており、1941年の年頭には所属する農林省の機構が改正されてその直後にアフガニスタン経済使節団が来日している。さらに1942年の4月以降は戦争関係の記述が激増し、遂に1943年12月29日には尾崎に陸軍技師の発令が下って「軍ノ食糧自給ヲ一手ニ受ケ持ツコトトナッタ」。尾崎と軍部との関わりについて一言すると、「日記b」の1941年年頭に尾崎が書いた「決意断行」の文字がこのことと密接に関係しているに違いない。つまり既にこの段階で尾崎は自ら希望して日本の戦争遂行に積極的に関わろうと決断していたと推察されるのである。

尾崎はその傍らアフガニスタン協会にも関わりを続け、同国やイランの情勢にも関心を払っていたことが窺えるが、1944年10月に東京で発病して（小型パラチフス）その後は空襲関係や身の周りの記事ばかりが目立つようになる。

「日記b」の後半は日常の細々とした記載が次第に多くを占め、1945年8月15日に到って尾崎は「全ク万事休スデアル。何故ノ降服デアルカ。明治天皇様ニヨリ築カレタル帝国ハ遂ニ今日ノ悲シイ日ニ会ウコトトナッタ」と書くことになる。尾崎はこれに続けて「自分ノ今後ノ身ノ振り方ニツイテハ既ニ決心ガ出来テ居ル。必ラズヤ我々日本人ノ上ニハ苦難ノ重圧ガ加ヘラレルデアラウ。コレヲ忍苦スルコトデアル」とも書き記している。

翌1946年尾崎は農商務省の職を辞して故郷の山口県防府市真尾に戻り、1949年以降は山口農業試験場長を務めるが、戦後は一切アフガニスタンに関して公に発言することなく、1985年12月に郷里で亡くなっている。享年83歳であった。

3 尾崎の戦前公刊著作

前節で述べたように、尾崎三雄氏は当時の西アジア・回教世界にアカデミズムの立場から

関わった訳ではなかった。彼は第一義的には農商務省の技術官僚としてアフガニスタン行きを命じられたのであり、彼にとってアフガニスタンとの関係はむしろ外部からの要請、国家からの下命によるものであった。

だが尾崎はこの外部（「大日本国帝国」政府）からの要請・命令に対して極めて誠実に対応しようとした結果、彼のアフガニスタン現地における行動はほとんど学術的といってもよい精確さを伴うものとなっていった。また残された記録を見ると、そうするだけの内面的な必然性もあったものと考えざるを得ない。尾崎はアフガニスタン行きを単なる業務上の義務とは考えず、むしろ「日本人として」の実力を見せる舞台として、また自らを高める研鑽の機会として捉えていたと思われる。彼が結婚して 9 年目の妻鈴子さんを敢えて現地に伴ったのもそのことを示している。

彼はアフガニスタンの事情を記録するための道具立てとして写生道具、顕微鏡、計測具類、解剖道具、ローライフレックスの二眼レフカメラなどを現地に持ち込み、特に写真は数百枚撮影したものが残っており、現在でも貴重な記録となっている（その主なものは『日本人が見た‘30年代のアフガン』⁷において見ることができる）。そしてアフガニスタンに関する極めて詳細な記録を時系列的な日記（これは彼の私的な感情を吐露するはけ口ともなっていた）とテーマ別に纏めたフィールドノートの二本立てで几帳面につけ通したのである。

このような現地における作業の積み重ねのうえに、尾崎は本解題の末尾に掲げた 20 点余りの著作を日本の敗戦までの 6 年ばかりの短期間に残している。そのうちの半数程度は帰国後 1 年間のあいだに書かれたものであり、前節の経歴でも述べたように彼はその後陸軍技師として日本の南方における戦争遂行に動員されたため、アフガニスタンに関する知識がこの間の彼の本務に充分生かされた訳ではなかった。

またこれらのうち約半数はユネスコ東アジア文化研究センター編『日本における中東・イスラーム研究文献目録 1868 年-1988 年』（ユネスコ東アジア文化研究センター、1992 年）と堀込静香編『アフガニスタン書誌—明治期～2003』（金沢文圃閣、2003 年）のいずれにも採録されておらず、尾崎の公刊著作に限っても従来いかにその業績が等閑視されてきたかを物語っている。以下ではこの解題巻末に掲げた「尾崎三雄戦前公刊著作リスト」に従って尾崎の既に公刊されている論考の内容をいちいち紹介していくことにする。

(1) 1939 年までの著作

まず尾崎がアフガニスタンに関係をもつ以前の著作であるが、現在確認できるものとしては『理科教育』1934 年 9 月号掲載の「稲作害虫の被害状況及駆除豫防法」（6-12 頁）がある。この文章はまず稲作害虫の分類を紹介し、浮塵子（ウンカ）、螟虫（ズイムシ）、直翅類（イナゴ等）の被害の状況を説明したのちそれらの駆除予防法を簡単に紹介したもので、尾崎の専門分野の基本的な知識の一端を纏めたものである。

これ以降の尾崎の戦前の公刊著作はすべてアフガニスタンに関わるものである。それら

のうち、1939年2月7日の帰国後もっとも早い時期の文章のひとつが『青果時報』の1939年3月号に掲載された「アフガニスタン土産——素晴らしい柘榴とメロン」であろう。これは尾崎自身の文章ではなく聞き書きのような形で纏められたものであるが、アフガニスタンの柘榴（ザクロ）、メロン、柑橘について手短かに紹介している。さらに同雑誌の4月号ではメロンと柘榴の標本写真が「アフガニスタンの珍果」と題して掲載しており、これらのメロンの種子を尾崎が試作用として持ち帰ったことが記されている。

『實業之日本』4月1日号に書かれた「神秘の國アフガニスタンを語る」は、同時に掲載されたグラビアとともにアフガニスタンの一般的な国情を概略紹介したものであるが、その主旨および内容は次に扱われる講演記録『亜細亜の新興國アフガニスタン』や本資料集の巻頭に掲げたラジオ放送の原稿と大方変わるところはない。

1939年6月に日本國際協會から刊行された『亜細亜の新興國アフガニスタン』は、アフガニスタンからの帰国後勿々、3月1日に丸の内中央亭で同協會の会員を前に尾崎が行った講演会の筆記記録である⁸。講演記録であるから部分的には即興による誇張的な発言も含まれているが、全体として発言内容は周到に準備されており、また言及している項目はこれ以降尾崎が執筆した論考のテーマをほぼ網羅している。内容的には本報告書に所収のラジオ放送原稿と同様、特に日本との比較の視点が常に明確に意識されており、この点が尾崎の議論に具体性と説得力を付与しているものと思われる。

要するに帰国直後のこの時期、尾崎はアフガニスタン長期滞在という珍しい経験の社会的還元をやや性急に求められ、これに応じざるを得なかったものであろう。これらの資料の存在は、そのような帰国直後の慌しい事情を物語っている。

注目すべき尾崎の発表媒体として、孫文の大亜細亜主義に共鳴する松井石根が発起人となって設立した大亜細亜協會の雑誌『大亜細亜主義』がある。尾崎はこの雑誌に「アフガンの回教問題と國政現況」と「アフガン國境線の性格」の2本の論考をそれぞれ1939年と1941年に発表した。両者ともにアフガニスタンをめぐる政治情勢分析であり、この地域をめぐる列強の國際的角逐を論じたもので他の論考の農業関係および一般概説的な内容とは趣を異にしている。

帰国後間もない1939年前半に書かれたものとしてはアフガニスタンにおける民族・宗教の現勢を概観した「アフガンの回教問題と國政現況」があり、尾崎はアフガニスタンにおけるソビエトロシアの共産主義普及活動にも言及している。また1941年の「アフガン國境線の性格」ではアフガニスタンの國境線を北方、東南方および西方の3つに分けてそれぞれの現状と歴史的な成立事情を概観し、これらの「性格のうえに國家興亡の因果關係を見出」そうとしている。これらの論考のいずれもが現在においてもアフガニスタン國家の性格を規定する重要な問題であることは尾崎の情勢分析に対する問題意識的的確さを物語っている。

尾崎がアフガニスタンに関して本格的に論じた最初の論考は、『新亜細亜』第1巻第2号（1939年9月）に書かれた「現代アフガニスタンの構成」である。この『新亜細亜』とい

う雑誌は大川周明の率いる南満州鉄道株式会社（満鉄）東亜経済調査局が刊行した研究雑誌であって、大川の「創刊の辞」の「復興の気運は亜細亜全土に漲らんとして居る」という言葉からもこの雑誌のアジア主義的性格が鮮明である。

尾崎はこの論考の前半でアフガニスタンの概要を辿ったのち、後半において「國家組成の概要は・・・（中略）・・・、其の吾々の眼に映る外貌と運用せられて居る實際の内容との間には、可成の相違が認められる」（136頁）と述べつつモハンマド・ナーディル・シャーの施政方針およびそれに基づいた1931年憲法の詳細な項目別紹介を行っている。

尾崎はこれとほぼ同じ時期に回教圏研究所（所長大久保幸次）⁹の研究雑誌『回教圏』において「農業を通じて見たるアフガニスタンの断片」を執筆している。『回教圏』は近年復刻版が刊行されていることもあってこの論文は尾崎の著作中で最も知られているものかもしれない。だがこの論考はまずアフガニスタンの回教について概観したのち同国の農業様式を概念的・規範的に分類し、後半はアフガニスタンにおいて行われている度量衡と貨幣単位の詳細な紹介に費やされている。このためこの論文のみから尾崎のアフガニスタンにおける活動と知見の全体を推量することは、例え巻頭のグラビアを併せて見たとしても誠に困難であるといわざるを得ないのである。

この他尾崎は1939年と翌1940年に『日印協会会報』にも2本の論考を発表している。日印協会は1902年に長岡護美、大隈重信、渋沢栄一などによって設立され、日印両国民の親善を計る傍ら、インド事情の調査、日本文化と経済事情の紹介等を行った組織であり¹⁰、現在も外務省所管公益法人として存続している。

1939年10月のものは「アフガニスタンの産業に就て」と題された論考であり、同国の地理的概要と生産の三要素（自然、労働、資本の条件）を簡単に紹介したのち農業、畜産業、林業・鉱業、工業、商業の各分野について概観する。その農業の項において尾崎は「阿片の生産もあるらしいけれども、遂に一度も視察の機会を與へられなかった」（87頁）と記している。また結論部分において尾崎は「アフガニスタンの産業は、居間興隆の途上にあるも、封建的回教制度から現代科学文明制度への過渡期にあつて、外面的には生産要素の改善に幾多の困難を有し、内面的には其の世界観の轉向に大きな悩を持って居るのである」と述べて、その将来的な発展にいささかの幻想も持ちえないことを強調している。1940年の「外人購買者の眼に映るアフガニスタン」については後述する。

1939年11月には他にアフガニスタンからの帰途立ち寄った「カシミール遊記」を雑誌『旅』に発表しているが、これについては本報告書所収のフィールドノートに元となった記録が含まれている。また国際観光協会が主催した座談会に回教圏研究所の小林元らとともに出席して発言し、その記録が『国際観光』に掲載された。

(2) 1940年以降の著作

1940年以降になると日本の戦況が急展開するなかで尾崎も他の業務に忙殺されたようで、アフガニスタンの著作点数は年間2点ないし3点と減っているが、内容的にはアフガニス

タンから持ち帰った資料を活用した興味深い論考が含まれるようになる。

1940年にはまず大日会の発行する『大日』¹¹に「アフガニスタン人と回教」という論考を発表している。この一文で尾崎は3年間の現地経験から得られた実感的な回教観をより普遍的な回教論の水準にまで昇華させようと試みている。尾崎はその末尾で「回教は信仰の形に捉はれた所謂回教的生活から離れて、コーラン本来の精神に帰り歸り、現代人の魂の糧となり得るとき、はじめて存続の意義を持つであらう」と述べ、現代世界の必然的趨勢である近代化との関わりにおいて回教の可能性とその限界について彼自身の見解を表明している。

次に尾崎は上述の『日印協会会報』に「外人購買者の眼に映るアフガニスタン」という論考を掲載している。その「はしがき」において尾崎は自ら「印象記」と称しているが、内容的に見ると「貨幣」の記述は大略上述の『回教圏』所収の「農業を通じて見たるアフガニスタンの断片」のなかの「貨幣単位」の項をさらに敷衍して読み物として提示したものであり、またこれに続く「物価」および「商店」の部分では本報告書所収のフィールドノート¹²の記録の一部などが縦横に使われたものと推測される。ここで尾崎はアフガニスタン現地での日常的観察の一端を披瀝しており、非常に興味深い一文である。

1941年以降の著作としては既述の『大亞細亞主義』1月号に執筆した「アフガン國境線の性格」の他に、内閣情報局編纂の『寫真週報』に掲載した「アフガニスタン經濟使節團來訪——アフガニスタンとはどんな國か」というグラビア写真とその解説的な記事もあるが、内容的に特に興味深いのは尾崎自身が設立に関わったアフガニスタン協会の会報創刊号(1942年発行)に書いた2つの論考である。

このうち「アフガニスタンの人々とお茶」は同国の茶店における風景の点描から筆を起し、隣国イランとの飲茶をめぐる文化習慣の相違を比較したのち近年日本産のお茶が同国の輸入の約5割を占めることを指摘する。さらに後半ではお茶の品質等級に対する基準が文化と嗜好の違いを反映していかに日本とアフガニスタンのあいだで異なるかを自らの収集したデータによって仔細に検討している。アフガニスタンにおけるお茶の価格や一人当りの消費量までを統計的に考察する本編は、「お茶」という一商品を通して見た尾崎なりのユニークなアフガニスタン地域文化論の試みとして評価すべき論考である。因みにこの一文は茶業組合中央會議所発行の雑誌『茶』1942年9月号にほぼそのまま再録されている。

また「アフガニスタンの暦」の方はイランと同様に西洋暦、ヒジュラ太陰暦、および独自のヒジュラ太陽暦を併用するアフガニスタンの暦の事情を紹介した小文である。

尾崎はまた内藤智秀、三橋富治男、田邊宗夫、村田昌三とともに目黒書店刊行の『中アジアの風雲』(1941年刊)の編者の一人に名を連ねており、「第六 現代アフガニスタンの大觀」の章を執筆している。このうち叙述の半分以上を占める「(一) 地理概觀」は恐らく尾崎がアフガニスタンから持ち帰った地理教科書¹²などの資料を用いていると思われ、また後半の「(二) 住民」「(三) 産業」「(四) 現代のアフガニスタン」の各節については大略尾崎のこれまでの著述を再構成したものであるといえる。

大和書店発行の満鉄東亜経済調査局新亜細亜編集部編『西南亜細亜の歴史と文化』に所収の「現代アフガニスタン」については未見であるが、1939年に『新亜細亜』に掲載した「現代アフガニスタンの構成」のほぼそのままの再録であると思われる。

最後に1944年に東亜研究所¹³の資料として謄写版印刷されたヴァヴィーロフとブキーニッチの共著『アフガニスタンの農業』の翻訳がある。これは「序」¹⁴において述べているところによれば、ロシアの遺伝学者ヴァヴィーロフによって1929年にレニングラードで出版されたカフーリスタンを中心とするアフガニスタン調査旅行のロシア語報告書の英文摘要の翻訳紹介である。尾崎はこの報告書の存在をアフガニスタン行き直前の1935年9月1日に茶業組合の梅原義治という人物から教えられて知っていたことが「日記a」の記述から明らかである。尾崎は訳文の随所に彼自身のアフガニスタン滞在中の知見を訳注として挟み込んでおり、この当時日本の戦況が愈々厳しさを増すなかで自らのアフガニスタン研究の総決算としてこの翻訳に取り組んだものではないかと推察される。

以上観てきたように尾崎三雄が戦前に発表した著作は量的に決して少ない数ではないが、それでも尾崎の3年間のアフガニスタン現地滞在中の調査活動の蓄積と尾崎自身が当初目指していたアフガニスタン研究の総体からすると、内容的に「氷山の一角」でしかないとの印象は否めないのである。今回この報告書において尾崎の私的な記述を含む「未公刊資料」をあえて公開しようとするのも、この欠を埋めようとする意図からのことに他ならない。

4 尾崎の戦前未公刊資料

(1) 「フィールドノート」の特色

尾崎は1935年9月から1938年9月までのアフガニスタン滞在中に、現地で購入したと思われる19.5cm×16cmの大きさの罫入りノートを使用して調査活動の記録を克明につけていた。保管されていた山口県防府のご遺族のお宅で最初に拝見したときには20冊ほどがあり、これらはすべて現在一橋大学小平校に移されている（将来的にはアジア経済研究所図書館に移管する予定である）。

これらのノートは現在の民族学や人類学のいわゆる「フィールドノート」に当るものであると思われる。フィールドノートというのは特に明確な定義がある訳ではなく、またその記載の方法もその目的や分野、記録者の工夫や個性などによって様々であるのは当然である。尾崎は特に民族学を修めた背景はなく、これらの記録に際して「民族誌 ethnography」のようなものを意図している訳ではなかったと思われる。むしろ尾崎が目指していたのは現在の用語でいう「地域研究」に近いものではなかっただろうか。そこでここでは現地調査や調査地での滞在中に記録されるノートという極めて広い意味での「フィールドノート」の呼称をこの尾崎のノート群に対して用いることとしたい。

尾崎の20冊のフィールドノートは大まかなテーマ別に分かれており、今回この報告書で公開する主要な10冊に関しては、それぞれ背表紙ないし表紙に彼自身の筆跡でタイトルが

付けられている。

フィールドノートは約 20 冊の中から選択した以下の 10 冊で構成される。なお現状ではさらに表紙の上に尾崎のご遺族の方が内容と日付を注記した紙片が貼られた状態になっているので、これをコロンのあとに記しておく。

1. カンダハル紀行 第 1 回 第 2 回： 1936. 12. 9-1937. 2. 13 1937. 6. 13-1937. 6. 28
2. Jalal-abad ゼララバッド紀行： 1936. 9. 29-1936. 10. 31 1936. 11. 23-1936. 12. 16
3. 印度旅行〔後半〕： 印度 1938. 9. 20-1938. 10. 8
4. Bagh-e Babul： 農作業 1935. 11. 12-1938. 4. 14
5. Bagh-e Bini-hisar： 農作業 1935. 11. 16-1938. 5. 18
6. Bagh-e Estalef： 農作業 1935. 12. 2-1936. 11. 10 1937. 4. 3-1937. 9. 1
7. 総理大臣 商務大臣 その他
8. List of Collection. Insect： 虫
9. 懐ニ納メテ： 国情・風習・風俗
10. 覺帳 Memo 見夕俣

これらのフィールドノートは、内容的に以下のように分類することが可能である。

(ア) 紀行文 (1. ～3.)

(イ) 農作業記録 (4. ～8.)

(ウ) 総記・雑記 (9. ～10.)

これらのうち 1. の「カンダハル紀行」と 2. の「ゼララバッド」紀行については既に述べたように『日本人が見た‘30 年代のアフガン』(石風社)において収録されている。また 3. の後半の「印度紀行」もこれに収録された「カシミール遊記」(『旅』1939 年)の元になっている資料である。ゆえに「(ア) 紀行文」については上記書籍によって既に紹介が済んでいるということもできる。

だが尾崎自身にとってはこのような紀行文の類はいわば余業であって、アフガニスタンにおける彼の本領はむしろフィールドノートに即していえば「(イ) 農作業記録」と「(ウ) 総記・雑記」にあったのではないかと思われる。勿論内容的にいえば「(イ) 農作業記録」の既述は総じて単調であり、また「(ウ) 総記・雑記」については一般の読者にも興味深い内容を含むもののあまりに雑多な内容が並んでいる。だがそれだけに 1930 年代後半のアフガニスタンの農業関係および国内的事情についての一次的な生の資料として、他に見いだすことの出来ない貴重な情報を含んでいることは否定できない。

そこで本報告書においては上記の 10 冊のフィールドノートについて、記述された全ての内容を表記の揺れ(「カブール」か「カーブル」かなど)なども含めあえてそのまま活字にすることを原則とした。

尾崎のアフガニスタン関係の資料としては他に一群の写真資料および若干の現物資料がある。これらの保存と公開については今後の我々の課題である。また『青果時報』1939 年 4 月号に掲載された「アフガニスタンのメロン——口繪の説明」によれば、尾崎はアフガニ

スタンの作物の種子や苗木なども持ち帰っている。ご遺族の幸宣氏によると尾崎はアフガンからの帰国時に石榴の苗木を3本ほど持ち帰ったそうで、そのうちの1本のみが自宅の庭先で根付いて現在もあるという。

(2) 新発見の「日記」の内容

2003年4月の尾崎氏宅訪問後、故尾崎三雄の残した日記が新たに発見された。このうち戦前の日記は2冊あり、どちらも黒い表紙の16.5cm×10cmのメモ帳である。1冊目はアフガニスタン関係のを中心に記載したもの（「日記a」）で昭和10年7月23日から始まり昭和14年12月29日まで、2冊目は敗戦前後までの事情を記載したもの（「日記b」）で帰国後の昭和14年4月25日から始まって昭和20年12月31日の記述で終わっている。

このように1939年の数ヶ月間が2冊の日記において重複している理由は、尾崎がアフガニスタン招聘関係の記録とそれ以降の記録をある程度意識して書き分けたことによるものと思われる。

この「日記」は戦前に公刊されていた尾崎三雄の著作や今回この報告書で全体を公開するフィールドノートのさらに背景にある事情を明らかにする第一級の資料であるが、当時カーブルで交際のあった日本人関係者に対する個人的な感情の吐露などを含んでおり、現在の時点でこれを公刊するには未だにためられる部分が少なくない。それゆえこの「日記」の全体的な公開については将来の機会を待つことにしたい。

いずれにしてもこれらの「日記」は極めて厳しい生活環境や人間関係に身を投じた尾崎が公開を前提にせず自らの心情を書き綴ったものであるだけに、生前公刊された著作やフィールドノートの記述と比べても驚くほど激しい言葉でカーブルの日本人社会やアフガニスタン社会への感情を吐露している。またそれこそがこの「日記」を記す目的であったとも考えられる。以下ではその一例を引いてこの「日記」の性格を覗うことにする。

尾崎はアフガニスタンに到着してしばらく経った1936年1月17日未明に実父を喪っており、その一周忌に当たる1937年1月16日に際して以下のように記している。

「今夜カラ明日ニ掛ケテ亡キオ父様ノ一週忌デアル。今頃オ母様ヤオ兄様達ハ準備ニオ忙シイコトデアロウ。

月日ノ経ツノハ本当ニ早イ。自分ノ仕事ハ少シモ拂シクナイノニモウオ父様ノ一週忌ガヤッテ来タ。三週忌ニモオ参リハ出来ナイ。

自分ノ居ラナイコトガオ母様ニハドンナニ淋シイコトデショウ。5人ノ子供ガ居ッテ二人シカ参列出来ナイ。親トシテ此ノ上ナイ淋シサデアロウ。

………（中略）………

自分ハ「カンダハール」ニ鈴子ハ「カブール」ニ離レ離レデ思ヒ思ヒノ感慨ニ耽ケ〔ラ〕ナケレバナラナイ。思ヒ出ヲ語ルコトモ出来ヌ。

ペルシャ語ヤ英語デ此ノ切ナイ胸ノ中ヲ誰ニ語ルコトガ出来ヨウ。又誰ガ聞イテ呉レルデアロウ。

……（以下略）……」

このような厳しい精神状態のなかで、尾崎はアフガニスタン社会に対しても非常に辛らつな調子で批判の言葉を繰り返し書き連ねている。ここでは1938年10月20日に書かれた比較的短い記事を引用しておくに留める。

「此ノ國ノ人ガ如何ニ非文明的デアリ又組織的デナイカハ此ノ一事ヲ以ッテモ知ルコトガ出来ル。

研究室トシテチャーマンニ一室貰フコトニナッテ居ッタ、然シ鍵モナク硝子モ破レテ居ルノデ修繕ヲ頼ンデ居イテ「ゼララバッド」ニ行ッタ、ソシテ帰ッテ見ルト其ノ室ハ購買局ニ貸与サレテ居ッタ。勿論室ノ決定ニハ自分ノ領収證サヘ提出シテアルノデアル。

此ノ不都合ヲ次官に誥ルト此ノ國ハコンナ國ダカラ辛抱シテ呉レと云フノミ。関係当局者ハ他ノ室ヲ上ゲマスト涼シイ顔ヲシテ居ル。」

また尾崎が1945年の日本の敗戦を機に故郷の山口に引込み、以後生涯にわたってアフガニスタンに関し一切公的な発言をすることがなかったその心情的な理由について、「日記b」の末尾に書かれた以下の記述（1945年12月31日）が多くを語っているように思われる。

「本年モ愈々最後ノ日トナル。終戦後ノ渾沌タル世情ノ中デ只食フコトニ追ハレテ今日ヲ迎ヘタヤウナ有様デアル。物価高ニ食料不足。生活ノタメニノミ生キテ居ルヤウデアアル。毎日ノ新聞トラヂオニ民主主義、言論ノ自由、国民開放等トマックアーサー司令部ハ喚メキ立テ居ルガ其ノ何処ニ自由ラシイ処、国民開放ノ明サガ見ラレルデアロー。連合軍ノ御用新聞、御用ラヂオト化シテ新聞、ラヂオ見ルノモ聞クノモ心ヲ傷メル。シカシ読ミ且ツ聞カナケレバ世ノ中カラ置キ去リニサレテ仕舞フ。敗戦ト云フコトハ一方的ナ押売ノ公平、平等、自由デアアル。世界均等ナル公平ヤ自由デハナイコトガ痛感セラレル。

既ニ9月15日退官願ガ出シテアルガ未ダニ許可ガ出ナイ。官庁ノ相変ラズノ非能率、非進取性見ラレル。早ク退官シテ大地ニシッカリ足ヲ踏張り、堅実ニ農村ノ指導ヲシテ行キ新日本ノ建設ニ尽シタイ。役人タルヨリ農民タル方ガドレダケ国ノタメニ役立ツカ知ラナイ。」

既に述べたように尾崎はこの「日記」の公開を前提とせず、あくまでも個人的な心情の捌け口として記述していたものと思われるが、それにも関わらず我々はこの「日記」を尾崎のほかの著作やフィールドノートと比較しながら検討することによって、現地調査とフィールドノートの記録を中核としていた尾崎のアフガニスタン研究の成果をより明確に跡付け、理解することが可能になると思われるのである。

なおとりわけ「日記a」のアフガニスタンに関する記載のなかには、今回この報告書に収録したフィールドノートの記載を別の視点から纏めなおしたような叙述が少なくない。そこで近い将来においてこの「日記」中のアフガニスタンに関する記述をフィールドノートへの注記のかたちで掬い上げ、主要部分について公開していくような方策を採りうるか

どうか検討しているところである。

5 尾崎のアフガニスタン研究の特色

最後にこの解題の結びとして、尾崎三雄の第二次大戦前夜におけるアフガニスタン研究のなかで筆者にとって特に興味深いと思われる特長を幾つか指摘しておきたい。

既に指摘したように尾崎のアフガニスタン研究は決して純粹にアカデミズム的なものではなく、当時の政策的な要請から始められたという意味でむしろ現代の「地域研究 Area Studies」に近いものであった。それは特に帰国後の彼の人脈が回教圏研究所や東亜研究所、満鉄東亜経済調査局などに広がっていたことから容易に理解される。また尾崎が帰国直後に鉄道省の湯本昇監察官のアフガニスタン地図の作成に協力したのは当時の「中央アジア横断鉄道」の構想との関わりがあった。

このことに関連して尾崎の研究の方法ないしスタイルは、二次的な文献よりも現地での一次的な情報の収集を重んじるものであり、フィールドノートや日記、写真など精確な記録を録ることを徹底させていた。尾崎のアフガニスタンへのアプローチはとりわけフィールドノートや写真などの微細な記録の積み重ねを何よりも重視していたという点において、現代の「現地主義」を先取りしていたとすることができる。これは彼の元々の専門が農業、それも病害虫駆除という理科系的な分野であったこととも関係するのかもしれない。

同時に帰国後の尾崎の著作などから窺えることは、尾崎がアフガニスタンの総体的な特徴を抽出・説明しようとする際に、その尺度として自己の背景にある日本人や日本文化との比較を常に意識していたという点である。これは現代の地域研究においてもなお非常に重要な方法上の問題であり、尾崎がいわば「現地主義的な地域研究者」として比較の観点を体得していたことは、その研究の「質」を考える上でも極めて示唆に富む点である。

また尾崎は当時日本にほとんど紹介されていなかったアフガニスタンの地に妻の鈴子さんを伴って赴いた。これは尾崎がアフガニスタンへの赴任を単なる一時的な仕事と考えず、その意味の大きさを理解していたからであろうと思われるが、一方「日記 a」などの中にはアフガニスタン人の行動に対する痛烈な批判（罵倒）の言葉が少なからず見出される。これらをすべて含めて彼がアフガニスタンという未知の文化と全人格を掛けて対峙していたことに強い感銘を受けざるを得ないのである。

最後に西アジアないし回教圏における古くからの農業国としてのアフガニスタンへの赴任、尾崎自身が農業関係を専門にしていたことなどが直接の背景となって、帰国後の尾崎は急激に「農本的アジア主義」ともいえるべき政治思想に共鳴していったと思われる。このような思想的展開には大川周明や大亜細亜協会、大日社などとの接触も少なからず影響していたであろうし、遺された尾崎の日本語蔵書からもその政治的傾向は顕著に読み取れる。尾崎が自ら積極的に関与した対米戦争の敗北後、故郷の山口県防府市で終生ほとんど隠居に近い生活を送った理由もこのことと深く関係しているだろう。

だが尾崎がこの時期に書いた文章をみると、公刊された著作にせよ新発見の「日記」に

せよ彼の思想の根幹にあったのは過激な天皇中心主義というよりは、むしろ実感主義的なアジア主義への共感と欧米列強に対する義憤に近い反感のようなものであることが理解される。アフガニスタン滞在時の記録などから伺える尾崎の資質からして、彼が奉じていたと思われる「農本的アジア主義」は思想それ自体としてはむしろ極めて素朴かつ保守的であり、少なくとも過激な政治的変革を志向するものではなかったであろう。

ただそれだけに、尾崎は敗戦後の日本の政治的、思想的な状況の展開に対して「柔軟に」応じていくことには積極的な意味を見出せなかったのではないだろうか。尾崎の思想形成にとって決定的な役割を果たしたアフガニスタンの現実は敗戦後の当時もそこに厳然としてありながら、他方で敗戦直後の日本はこの地域に積極的に関わっていくだけの内在的な必然性を決定的に喪失していた。

尾崎が戦後に『月刊雨読』や『農業山口』などに書いた文章を見ると、彼が日本社会の激しい変化に対して一農民としてどう距離を保つかに苦心していた様子が伺える。同時に日常の様々な場面で尾崎の判断を支えていたのはやはりアフガニスタンでの強烈な体験の記憶であったこともまた理解される。勿論尾崎にはアフガニスタン研究を山口で継続するだけの準備はなかったにせよ、例えば 1979 年末のソ連軍のアフガニスタン侵攻以降の激しい展開を晩年の尾崎はどのような思いで見つめていただろうか。

尾崎の死後 16 年を経て、尾崎の遺したアフガニスタン関係の資料が写真展をきっかけに再び注目を集めているのは決して偶然ではないであろう。現在の日本におけるアフガニスタンへの眼差しのあり方は何がしか 1935 年当時のそれに相似しているとも思える。以上のように考えると、戦前に尾崎の遺したアフガニスタン地域研究の成果と課題が、幾つもの時代を隔てた現代の日本において我々に問うているものは予想外に重く、また現在性を帯びたものでもある事が理解されると思うのである。

(鈴木 均)

1 本解題では 1935 年から記載のものを「日記 a」、1939 年から記載のものを「日記 b」と呼ぶことにする。

2 『第四回情報——アフガニスタン並パレスタイン記事』アフガニスタン倶楽部、出版年不詳、49 頁。アフガニスタン倶楽部は田鍋安之助が中心となって 1935 年に設立、1944 年にアフガニスタン協会に改組された。尾崎もアフガニスタン倶楽部およびアフガニスタン協会に関係し、「日記 b」によれば 1939 年 12 月には役員を引受けている。

3 尾崎三雄『亜細亜の新興國アフガニスタン』日本国際協会、1939 年、56 頁。

4 前嶋信次『アラビア学への途——わが人生のシルクロード』日本放送協会、1982 年、113 頁。なおこの記載で前嶋が「小田急の電車の中で」遇ったという人物は『アフガン記』（相模書房、1943 年）の著者近藤正造のことであろうと思われるが、一方同書で言及している『アフガン記』という赤い表紙の本」というのは下永憲次『あふがにすたん記』（文聖舎、1934 年）を指していると思われ、俄かに決することはできない。

5 尾崎が持ち帰った現地資料のなかにもこの一端を見ることができる（『アフガニスタン研究基礎ノート』所収「尾崎三雄氏収集による 1930 年代のアフガニスタン現地資料」を参照）。その一例として当時の政府系新聞『アニス Anis』の 1935 年 4 月 3 日号に「日本史」の

連載記事が掲載されており、この号では日清戦争から日露戦争の時期が扱われている。

Ludwig W. Adamec, *Afghanisutan's Foreign Affairs to the Mid-Twentieth Century*, Arizona, 1974. の 300 頁の Chapter 7, Note 10 で言及されている 1936 年 2 月 5 日号の「日本のイスラーム」という記事もこの資料中に含まれているが、この記事は「外国情報」のなかの短い一本である。同号には他に「日本の職業倫理」という長大な記事が「翻訳記事」として掲載されていることを付言しておく。

⁶ 尾崎「カシミール遊記」および本報告書「印度旅行」を見よ。

⁷ 尾崎三雄（文・写真）『日本人が見た'30年代のアフガン』（石風社、2003年）。本書は尾崎が撮影したアフガニスタン関係の写真多数を前半に掲げ、後半では尾崎夫妻の親族宛の私信およびフィールドノートの2冊「ゼララバッド紀行」と「カンダハル紀行」を収録、最後に雑誌『旅』に執筆した「カシミール遊記」を配して尾崎のアフガニスタン関係資料を俯瞰的に紹介した好著である。

⁸ 尾崎の「日記 b」によると 1939 年 5 月 22 日に原稿を提出している。

⁹ 回教圏研究所については以下の文献を参照。大澤広嗣「昭和前期におけるイスラーム研究——回教圏研究所と大久保幸次」『宗教研究』341号（2004年9月30日）277-300頁。

¹⁰ <http://homepage1.nifty.com/boddo/>（佐藤哲朗作成のホームページ。）

¹¹ 大日社設立は 1930 年と考えられ、雑誌『大日』は翌 1931 年から 1945 年まで 14 年間に亘り発行された。大日社は杉浦重剛を師と仰ぐ政教社グループが頭山満を担いで興した団体であり、例会世話人は末永節と宅野田夫が務めていた。その基本的な思想は、「普遍的な皇道主義等を基礎にした西洋近代への根源的批判と興亜論の展開」であった。

<http://park5.wakwak.com/~asia/index.html>（「アジアの声」ホームページ）

¹² Mohammed Hosein Khan(ed.), *Joghrafiya-ye Afghanistan*, Lahor, H.S.1306[1927].

¹³ 東亜研究所は 1938 年に近衛文麿を総裁とし、企画院の外郭団体として設立された。本資料表紙裏の記載によると尾崎は 1940 年 9 月に研究所の委託を受け、1944 年 1 月に完了している。尾崎の「日記 b」では 1940 年 6 月 1 日に調査の委託を承諾したとある。

¹⁴ 尾崎は「日記 b」で「序」を匿名で執筆した人物について「近藤先生ノ筆カト思ハレルガ洵ニ敬服ノ他ナイ」と記している。この「近藤先生」というのは東京大学名誉教授の近藤康男のことであろう。